明治三十八年十月[illegible]日第三種郵便物認可

朝鮮日報

紀元二千五百六十五年　光武九年　明治三十八年三月四日　土曜日發行

定價　壹ヶ月金參拾錢　[illegible]
廣告　[illegible]
發行所　釜山幸町[illegible]　朝鮮日報社

●京城通信（廿八日特派員發）

▲特使着仁　在滿州我軍總司令部を經たる韓國特派武官長及村木東宮武官長の一行は此程大連を經して明日仁川に着せらるゝ筈

▲第四回國庫債券發行（公使館着公報）今回政府は第四回國庫債券一億圓を發行す利子六分償還期限七ヶ年發行價格額面九十圓應募申込期限四月廿五日より三十一日まで但し首回に付四圓の保證金を要す拂込は四月より八月まで六回に分つ但し數回分前拂を妨げず

▲佛國公使館護衛兵更代　當地佛國公使館護衛兵中八名交代せり昨日交代したり

▲萩原書記官邸韓夫人招待　一昨日の招待には李址容夫婦閔泳結夫婦及朴義秉夫婦會談したる由なるが近く又李載克夫婦其他を順次招待して夫人の交際をせしむる筈なりと

▲李資榮の佛國漫遊　李資榮は數年來佛國派を以て漢城政界に立ちたるものなるが近來形勢自己に不利なるを見遁からず漫遊として佛國に赴くべしと云ふ

▲白銅貨交換率に就て　目賀田顧問より直接聞きたることにあらざるも信用すべきの說によれば舊白銅貨の交換率は以前より噂ありしが如く半減即ち二錢九厘にて行はるべしと云ふ

▲官制改革は各部混雜　官制改革既に確定し一兩日中に官報に發表せられんとする今日に當り各部內紛議を生じ居る由にて或は一兩日間其發表を見合せらるゝに至るやも知れずと聞く

▲改革軍制の發表　軍政改革案は既に完成し皇陛下も不日發表すべしと云ひ居らるゝ由なれば遠からず其發表を見るを得べし四月以後は新聞各道巡回の後に發表さるべしとの說は稀薄なるが如し

▲水道工事着手　コールブランの水道布設の事は既に成りありし由にて最早諸種の機械も到着したれば不日着手するに至る可く而して現在の朝市場を南大門外に移して其跡を材料置場となし事務所は西大門外の新築家屋を以て之に充て尙水は麻浦より之を引く計畫なりと聞く

▲布哇萬民の請願　駐米韓國公使館より內部に報じ來りたる所によれば布哇萬民[illegible]

尤使等の訴訟に關し岡崎の在住民に五六千に婦せしも之を統率して其生命財產を保護する官吏なければ茲に官吏を派せられたしとあり依つて領事を派遣せられたしと右につき蠶種は多分我領事に於て保護を依頼するならんと云ふ

▲駐佛公使の報告　駐佛韓國公使より外部に報告し來れるものを見るに同館書記生命明秀病氣につき歸國を願ひし事を乞ふ然れども本館は事務多端にて送還する能はず依つて別に參書官一名を派し金送附せしめられたしと云々▲又韓國政府より伊太利皇帝に贈呈すべき金尺大綬章は訓令を奉じ昨年十月十二日羅馬府に至り該勳章を參觀し證約書には各員と共に同月廿四日調印せり云々

▲伊太利より本使に三等勳章を授り來れり

▲仁川監理の報告　仁川監理より昨日外部に報告せし所によれば本港應信所は人夫集會所なるが日本人鈴木辰藏なるもの勞働組を組織して日韓人數千名を集めて其應信所の利益を奪はんとするを以て本港各商店及該所員等は日本領事に訴へ出しも遂に要領を得ず而して日本憲兵は之を發會せしめたれば今暫く無事なるも民情極めて惘然たりと

▲學部より度支部に照會す　幣原坦氏を本部の學政參與官に雇聘し毎月薪水料三百圓家屋料三十五圓合し紙幣にて三千六百八十五元を政府に提出して支給するとなりたるが該氏の事務所は新築せざる可らず椅子、卓子、日用品の類も之を新備せざる可らず從つて新築費の五千八百五十三元六十四錢を物品購入費として九百七十九元九十錢を丸て銅貨にて支給せられて可也云々

▲任命　李根豐は專邊觀察使に任ぜらる

▲郡守奏本　二十七日郡守の奏本如左

完山　徐龍滔	英陽　李範詰	鐵安　河圭一
龍潭　尹奭應	濟州　尹昌根	南原　尹贊
智島　洪世泳	陝川　趙重羽	興海　鄭肅朝
康英　閔泳恪	李興　吳尹祚	高原　朴其阜
竪川　李季西	梁山　禹重殷	熊川　尹[illegible]宗
庇仁　伊秉求	榮川　金泳運	甲山　朴義成
石城　吳根壽	寶原　曹斗煥	富寧　金秉勳
洪原　申衍均	陽湖　李容九	草溪　申泰哲
平山　洪應祖	咸平　李晳稿	連山　李重哲
宜川　白樂三	錦城　具章曾	沔川　吳在道
慈城　尹東翰	鎭室　尹順伯	清州郡　李承羽
善山　朴欽勳	機張　林永學	安辻　宋榮大

▲軍備縮少案內容　韓國軍備縮少の案に付ては既報に發表する處ありしが本日或る確かなる人につき聞く所によれば其內容は左の如し

一、京城　は六個大隊の步兵を置き從來の親衛隊は名なりしを八百名とし（四箇中隊）以前の通り侍衛聯隊三大隊を置き騎兵砲兵等を現狀の儘置くと

一、地方　地方に十大隊（三中隊即六百名）即八個大隊を配置すると

右の方針により目下軍部に於て己に整理を進行せしめつゝあり事實の上に改革されたるを待ち公然官報に縮少案を發表するに至るべく改革以前に至り發表するは兵隊中に紛擾起り多少の騷擾を惹起す恐れあるを以て斯くの如き順序に確定されたるものなりと云ふ

慶尙道事情に關する釜山領事館の調査（續）

榆川

榆川は慶尙道淸道郡にありて西北山を負ひ東南川に臨み水流常に涸るゝことなく氣候比較的溫暖にして最も生活に適せり山には鵲角山華岳山あり水には紫川雲門川榆川ありて此處に於て皆相合して密陽に赴き以て凝川となる此地古來慶尙道樞要の驛院にして密陽大邱間の通路は必ず之れに依るの外なし又最も農作物の豊かなる東倉大川里より慶州に至るの分岐點たるも此地の戶數は僅に五十戶人口二百人に過ぎず物產の特種なるものは鯉魚にして六七月の頃は鐵具（站）多し山中には松茸あり栗實ありと云ふ（京釜鐵道停車場は榆川を距ること北方約十丁にあり）

淸道

淸道は慶尙道淸道郡にあり全郡に於ける戶口は無慮八千戶、二萬五千人あれども城の內外は通じて約三百戶千人內外に過ぎず每月五日十日の例市に際すれば遠近の商賈麕集して頗る雜沓を極む此地方固々磽确なるにあらずと雖ども概ね沃地にして氣候溫和飲料水の如きは最も可なり郡衙は淸道城內にあり是れ即ち古への伊西小國なり京釜鐵道停車場は淸道城を距る三ゝ西北一里にありて南に鳳山を負ひ東北雲門川を隔てゝ鳥惠山に對し稍々高地に位しあり草創の際にて未だ市街を成すに至らず僅に兩三棟の社宅あるに過ぎず

慶山

慶山は慶尙道慶山郡にあり古への押梁小國にして戶數二百戶人口千に滿たず住民の多くは城內にあり面名五あり邑內東面、南面、西面、北面と云ふ五面を總括すれば戶數三千三百戶人口一萬五千と稱す此地東には東山あり西に盤岩山あり北は曠野を控へて遠く栗嶋に及び土地稍々肥沃にして農產物少なからず氣候は他の土地と同じく六月頃は暑熱最も甚しく十一十二月頃最も寒氣烈し又六七の兩月頃には大雨暴々降り河水汎濫して約三年每に一同の洪水ありと云ふ土民は一般に農業を主務とし米麥等の穀物に次て柿、栗等を產出す大邱の柿と稱せらるゝものは其實此地方產のものなりと云ふ市日は陰曆每月五、十日の兩日にして五の日は邑內に開き十の日は原野に開かる郡衙は城內にありて京釜鐵道停車場も此地に設けられあり

大邱

大邱は慶尙道の中央に位し南鮮唯一の盛邑にして釜山京城間の要路に當り一道七千余郡中の四拾余郡及び全羅、忠淸、江原、諸道の重要市邑に對して四通八達の形勢を保ち洛東江の水運は更に之等要地間の聯絡交通を利せしむるのみならず今其各重要市邑との距離を見るに凡そ左の如し

京城	六十七里	釜山	三十一里
晋州	二十六里	馬山浦	二十一里
慶州	十五里	星州	七里
尙州	十八里	安東	二十一里
[illegible]項	十六里	蔚山	二十五里
全州	四十一里	公州	三十九里
沙西津	三里		

大邱の地勢を擧ぐれば八公山は其東北を擁ひ臥龍山は其西に連亘し南は琵琶山を負ひ西北東の三面は平野たり此間約五里を北に凡を二里あり又琴湖江ありて其源を門方永州郡の邊より發し河陽、慶州等に注がるゝ諸川を集め大邱の北方を迂回し其平野州買流し西方三里なる舊江倉に到りて洛東江に合し江流南下して海に赴くもの亦其西北を洗ふなり

大邱府城は凡を二百年前時の觀察使閔應珠の築く所なりと云ふ城壁の高さ七間余周圍二十町余石造にして東西南北より東門を設く其南門を嶺南第一門と稱し釜山方面より來れる道路を迎へ西門を達西門と云ひ北方遠に通ずべし其他北を拱北南東を達し右方に至り更に左折して郡衙の前を過ぎ分岐して小路細く城內の四隅に通ず城內最盛の區は即ち此道路にして商賈軒を連ねて兩街に殊に春秋兩期令市の際には此部分も亦開市場に充てらるゝなり家屋は城內にありて死藁稍半はするも城內にありては甍屋多く城の內外に亘りて家屋の密集連擔せる總數は戶數五千人口凡そ三萬人なりと云ふ風俗は概して遊惰なりと雖も之を他地方に比すれば稍々儉素にして人情淳撲の風あり

百雜話（一）

無染居士

●漢詩と今樣　詩には詩の性格あり歌には歌の雅趣ありて互に特色趣味を有し相譯すべからざるが如し以前より其譯を試むるものなきにあらざれども、多くは柄鑿相容れず例令ば「美人捲珠簾、深坐顰蛾眉、但見淚痕濕、不知心恨誰」を譯して「すだれかゝげて、たをやめの、まなお、かしらうなだれ眉ひそめ、淚濕ふぞ」と云ふが如くにして餘り面白からず、然るに左の一篇の如き其譯眞に迫り何れが原詩なるを知らざるものあり、

●孝子行　片淵琢

霜皓々。風颯々。夜深月落寒砭骨。華輪塔。呼去呼來過我門。葬罷後祭送應答。吾頁一醉欲眠。如泣如訴夢耶眞。忽推移衣件相見。街頭欣盆見異裝。老父向我驚歎說。整歪六十日失神。唯餘少小一少女。飴僅十三廿若辛。日夜行商無間斷。數年宿疾奈赤貧。宿疾赤貧兩難醫。爲父孝子三世因。三世逆因何未了。死生離別幾沈淪」嗚風凍兮雄地急。父子匡頭暫停泣。手足凍皴皮肉死。可憐落盛衛胸集。」嗚呼其亦孰西一蕃士。少小出國志未伸。落魄帝都十餘載。家無權飼往無從。今聞此語長大息。不勝紅淚濕衣巾。」

●同　今樣風（翻押）　高津森々

鐵きらゝと。風さゝと、月傾ぶきて更くる夜の、骨を截るかの寒さにも、華輪塔、々々、召せと我が門往交ひに、凍聲にぞ響を擲く、御酒酌ひて我が臥れば、訴へ現か泣く夢か、分かねばふつと妻をば、掩除ざまに出て見つ、街巷に盆花を捧げ、故り來る然ては父子ある老いさらばひの父我に、語る每言聽悲に、年は六十歲目は盲ひ、僅々獨の子は少女、堪へぬ商ひ夜日不斷齡ひも十と三つにして如何かは爲ん老が身の、此の貧しさの此病の、病も貧しも癒ね謙てを、雖他父とし子とはなる、生ても死ぬるも小車の、廻り廻ふ綱を泣き轉む。」朔風凍えて地裂くに、急る父子が低頭に、少時佇む其の手脚、凍さけて剝ちぬ、此を目の前り見ば誰か、泣き突れまで徒に在る、「ア、我も將た人數の圖は、懷紫の孤寒生圖をば早く出でつれど、抱負をば得も伸べて、世をいたづらに十年餘り、東京にてそは漂泊へれ、家訓ぐ子すら未だ無きに、往く鄰里だも有らぬ身に、聞く即今の物語り、愚ももろ絕ねん思ひなる、落る淚は頒血汐か、如何に秋の勝ふ可けむ」」是れ眞に双美なり、詩歌を學ぶもの鑑となすに足らんか。

小品文

●わか書策　古山生

今君の御書面に接した、自分は永い夢の中から覺めて芳紛と香ふ枕頭の生花を珍らしろうに眺むるやうな又は暫らく會はなかつた戀人が月の夜に自分を訪ねて來て接吻したやうな何んとも謂ねぬ懷しさと戀しさとの念に驅られざるを得ない、ろして一枚のはがきは自分に一人の正直にして溫行なる小學校師進んで未開の地に入り天職とする處の教育事業に精勵して居る一人の舊友を眼前に髣髴せざる能はずであるそれと共に自分は七八年以前の古き紀念、彼の杉林や老櫻に圍まれたる或小さき鄕の小學校と其の小學校の兒童と而して彼の叢の中に笑ふ七嶺峯と吉田川の流れと否々ありとあらゆる美はしき故鄕を追懷せざるを得ぬのである、君よ吾等が幼時の紀念は彼の美しき故鄕のいゝいゝ山河が今猶は大切に失はず包んで居るであらうか。故鄕の山河は依稀たるものであらう、而し作ら人生なる爭鬪の巷に鬪ふ吾等が思想の經歷は何うであるか自分は疾病と鬪ひ貧苦と戰ひ、ありとあらゆるものと鬪ふ一個の武士と變じて居るではないか。あゝ彼の柴崎あたり月ほがらかな夜に醉ふたわれ〳〵は今や時閒なる一の魔王の犧牲となりてパンの爲め幾多の慘劇樂餐に血を流さねばならぬといふは何んたる事であらうか、而かし自分は敢て鬪い事を云ふまい自分が今後生存すべき廿六年をば最も花々しく最も有益に鬪ひ爭ひ而して勝利を得ねばならぬ。（つゞく）

讀者文藝　百字文

●樂書　やつを

去年の夏不幸にも門司の〇〇社が解散した時僕が思ひ〳〵の樂書、中にも友の梅雪が二階の襖に「命あらば亦も來て見ん門司が關」（後の句を頼む）としたので僕が「筆立山に花の咲く頃」と付けたには一同思はず噴き出した

●ぜんざい　露堂

杉は嚴顏に千歲の事を擬り柳は小川に綠の影宿る卯月の初旬亞卒胴のスキ腹にシコタマ潰め込むだゼンザイ餅時の風味の絶好我忘れんと欲して忘る能はず噯我け春色に懷想顧留す苦學時代の京のゼンザイ

俳句

徐々と流れはじめし春の氷　春狂生
手すさびに昔のぶや紙雛　同
春雨や氣の遠くなる針仕事　同
口切や今日は夢の友酒の友　同
醉しれて句も得なさず梅の春　天奴
久々の友のたよりや梅一枝　同
落椿部がにのせて春の水　同
長堤一里柳煙るや春の雨　同

復讐　武勇の譽

井竹林講演　本社員速記

第四回

重左「重太郎今日は兄重藏と一と手の試合を仕まつれ」重「委細心得ました」重左「重太郎に一と手重藏教へて遣はせ」重藏「よろしうございます」重左「重太郎、何か貴樣は腕父さんの處で兩三輩を打込んだといふおとがあるがソンナおとで慢心してはならぬ習はずして出來る氣づかいはない重藏が今日から教へてやる一生懸命に修業いたせ」重「有難ふぞんじます」竹刀を取て重藏に立向ふ重左衛門は此方に見て居ます此人は矢戶家に於て一と呼ばれた武藝の達人ハテナ重太郎の氣合と容易ならぬがふしぎなことがあるものだと見て居た其內に立合になりましたが決して兄を打ませんよき程にやゝ小半時ばかりあしらいまして立合ましたが竹刀を投すて重「恐れ入りました」頭藏は額に汗びつしよりかいてセイ〳〵いつてゐる重太郎は別に勞れたる容子もございません

重左「イヤ大に御苦勞だ重太郎今日まで竹刀柄を握らんとしては感心に太刀筋がよい能く重藏に教へて貰へ」重「有難うぞんじます」と口にはいへど心の中に之ぞ何らして兄重藏なぞの遠く及ぶ處ではない打べき處が度々あるのに打ずして今日は稽古はじめ兄弟の誼で重藏に勝をゆづゝた重太郎の恐ろさしといひ又彼の武藝といひ實するに余りあり如何して彼れ恁ばかり劍術を熟練せしやと不審晴れやりません父へは何ごとも重太郎は申しません只天然さうなはつたものでございませうのみいふ頭しも八月の十五日箱崎八幡宮祭の禮重太郎は既に命にもかゝはる九死一生の病氣を幸ひはひにたすかりましたも八幡宮の加護父重左衛門が早朝參詣いたしまして歸ると言頭をひよい重太郎たゞ一人で八幡宮へ參詣に赴むきました禮拜がはつて社前へ參りますと拉に玉屋といふ料理屋がございます呑で居たのが森玉平重藏成尾飛彈の倅れでござゐまして權五郎他に三四十人　權「森玉今通るのは重太郎じやアないか」平「左樣です」權「アノ奴郞め劍術がまらるで兎角竹刀づかを握らんといふおとだが」平「ソンナ話しです然しならはずして劍術か上手だとかいふやうなうわさをきゝました」權「ソンナ馬鹿なことがあるものか何うだ一ツ引ずり上げて彼奴を男つてやらうじやないか」平「夫は面白い」といふと森玉平藏が表へ飛出して　平「おいや岩見氏御參詣かナ」重「森玉氏」平「成尾樣の老旦那が玉屋へ來て呑でゐらつしやる御身の通行を見て是非とも重太郎と一盞遣はしたいとコーれつしやる鳥渡お立寄りを」重「急ぎます故何うぞ御勘辨を」平「いや折角權五郎どのゝ思し召だマア御手間はとらせんから」と無理に引上げて十分酩酊をしてゐる權五郎の座敷へつれて來る　權「いや重太郎ナア此方へ能く參つてくれた」成尾飛彈は老臣でございまして其の倅の權五郎　重「之は御不沙汰をいたしました」權「いや大層よい御機嫌で」權「いや大勢をつれて參つて最前から呑でゐる今御身の通行を見かけたから一獻上たいと思つて呼込んだ」重「手前は御酒をたしなみません殊に病后で」權「なぜ權五郎の盃は受けられぬか」酒呑のくせとして直にからんでくる　重「然らば御盃を頂戴いたします」迷惑には思ひながらたが止むを得ず盃をうける　權「森玉勇太郎は劍術はまらるで竹刀柄を握らんといふ話しだが大分劍術も出來るといふ評判だが」平「左樣で」權「重太郎左樣か」重「誠とに恐れ入りました元來手前は臆病でございまして武藝をならひません倉飯の道も體術も弓術でも恥かしひみとながら出來ません」權「いや大分武は出來んさうだ」たれが重太郎さ一ツ體術を試ろみるものはないかとヂロリ目くばせをすると委細心得ましたといつて本間一平蓮池郷五郎が重太郎どの一ッ手御指南にあづからうかナ

朝鮮日報

●門司特報（三月一日 特派員發）

第一軍左翼塚本兵團前面の敵情

去る二十五日戰線を去り本日當地に歸來せし某騎兵將校沙河左翼方面の敵情を語る大要左の如し

左翼第二軍に屬する塚本兵團は泡子沿、万家園子（林盛堡の正西約三里）に守駐せる敵軍と其間僅かに三百米突を隔てゝ相對持し居れり而して剰へ猛寒氣酷烈地物氷結して彼我共に防禦工事を施すとは頗る困難を感じ居るも決して不可能にはあらず即ち壁消を鑿ち其中に火を燃せば土部の結氷は漸次融解して踏落し自然に長塚を形成し又た別に防禦工事の最も簡便なる方法あり清國民家の多くは土塊造りなるを以て之を破壊し巧みに排列して墻壁を構築し水を灑ぎ置く時は一夜にしてペトンの如くに凍結し頗る簡單なる良法あるを以て左程困難ならず彼の黒林屯の如きは由來彼我兩軍の爭點なりしが黑溝臺會戰後我軍はロヤに之を放棄し居たりしに敵は寧ろ來て一個大隊の兵を送り目下盛に前記せるが如き方法に依り防禦工事を施し居れり而して敵は黑溝臺會戰後引續き此の前面にも其兵力を増加しつゝあるも如何せん士氣の沮喪は昨今に至りて殊に著しく現に一月中旬頃迄の投降者は十中の七八迄猶太人又は波蘭人なりしも昨今は歐露新徴兵の投降する者亦漸次に彼等の陣逃する處によれば本國にては内亂勃り政府は之れが鎭壓なる手段を執りて遂に鮮血を濺るに至り戰場にある兵も大に敵□可き事となりたるを以て[illegible]

東京電報

●全線不通（三月三日 午前十二時発）

西比利亞鐵道は暴徒工の爲め全線不通なれり

に彼方輸送の困難は愈々彈藥欠乏を來すに足れり

戰報

●彼我の大激戰

沙河は滯陣中なりし日露兩軍は去廿五日より共に活動を開始し共戰線四十里に亙り今猶は激戰中にて彼我の死傷尠からずとの報あり

●我軍の攻勢的態度

今回の沙河大激戰は我軍より攻勢的態度を執りしものにして歐州にては我軍の必勝を期し居れり

京城通信（二十八日 午后八時 特置員發）

▲民會の散會　韓政府より各道觀察府に訓令を發して民會及褓負商輩を曉諭解散せしむ

▲新銃の輸入　軍部より雲峴郡に訓令を發し新銃を買入しむ

▲稷山金礦閉鎖請願　稷山郡守郭璨より稷山金礦大砲を買知し新銃を買入しむ内部に報告を發し本郡金礦は民に妨害あるの故を以て韓政府より上奏し遂に閉鎖する事に至り之によりて境内の採掘事業は停止す[illegible]

せられたり

●仁川監理の報告に本日獨、佛兩國軍艦入港したりと云ふ

●遣外公使の召還

韓國遣外公使を召還すべしとのことは昨年以來屢々政府會議の議に上りしも遣外公使を召還するは獨立國の作面を傷くるものなりとの体面論出で決定に至らざりしが内外の事情は日一日召還の決行を促し來り韓廷も漸く決する所あり、しとみへ今般外部大臣李夏榮氏より皇帝陛下に對し召還の件を奏上し其裁可を經て愈々召還のことに決定したるは左の三公使なりと

駐日特命全權公使　趙民熙
駐佛特命全權公使　閔泳讃
駐獨特命全權公使　閔哲勳

右の三公使召還の後は公使館には參書官一名書記生一名を殘して事務を執らしめ機をみて漸次引揚くる方針なりといふ近來の英斷といふべし

●侍從武官長一行

滿韓駐箚軍顧問使特從武官長閔泳煥陸軍大將及東宮侍從武官長村木少將、陸軍々務局長步兵少佐伊達紀隆氏、陸軍人事局員步兵少佐千秋秋次郎氏其他將校三名下士以下十三名は滿韓軍の觀察慰問を兼ね去二十一日發日より大連灣に向ひ昨二十八日〇〇船〇〇丸に搭じて同地を發し仁川に向ひたるを以て今一日午前十一時仁川港へ來着の筈なり

●落合參謀長の出迎

別項閔侍從武官長の一行來釜に付韓國駐箚軍司令部よりは落合參謀長及副官二名は出迎の爲め今朝下釜の筈なりと

●岡部氏の韓國經營

岡部長職子は昨年韓國の上内地を視察せしが大同江流下[illegible]

右の内五隻は本年中に竣工すべきものなるが更に新造請負の計畫中に屬するもの二十餘隻にして總計約四万噸を以て滿韓南方面の擴張に充て是等の經營に一段落を畫するに至らば更に進んで印度洋を横斷して北米航路に到り南米中洋を横斷して北米航路を開くこと亦必ずしも遠きに非ざるべきを確信すと云々と中橋社長より某所に内話ありし由

●米豆下落と商家

米豆の下落は昨今に至り各商家一般に著しき打撃を受け韓人の村落より出づるもの少なき爲め金物屋の如き殊に甚だしき悲境に陷るもの多し

●同業組合組織の急

仁川京城方面に於ける日本貿易業者は何れも團体を組織し同業組合を編成して他國商家に當り相互に永遠の利益を企てつゝあり然るに當港貿易業者の多くは目前の利益を夢むに急にして個々別々の葵勢を執り適に團体的組織を企つるものあるも直ちに破壊するが如き不利益を爲すが如きは本港の爲めに悲しむべき事共なり云々と某有力實業家の談

●綿花の販路

當港に於て韓品製造及び特約販賣を爲す居るものは既に七名に及び居るが多分一斤の製造高拾貫料位にて少くも月三百六十貫目の製造高にて其品の販路は當港に於ける需要三分の一にして他は馬山浦、大邱方面に向ひつゝありといふ

●役員會の流會

昨日の商業會議所役員會は出席者少数のため流會となりたり本日午前十時より開會の筈也

●運漕組と二艘の汽船

當釜山運漕組が過般第四共同丸を買收し他に二艘の汽船を買入交渉中なるが本月下旬に至らば右二艘も到着航海に着すべしといふ

●大邱の演説會

大邱南門外の演説は物珍らしき事とて聽衆八百餘名に達し辯士は五名にして時事を論及せりと午後六時無事閉會したる由なるが全地は一体に政治に冷淡なる所なれば多く感激を與へざる由也

●買物帳廢止商店の

昨紙所報買物帳の弊に堪えざる商店にては此期を逸すべからずと右廢止の實行に着手する者頗る多き模様なりと

●馬山浦歸來客談

停車場の大工場締結されたりと雖も町内一般沈靜にして賣買の如きは又多くみるべきものなしと云々

●中井民長を招待す

石原民長外二三の人士は昨日中井京城居留民長を小倉庵に招待して饗餐を共にしたり

●大久保氏の死去

當釜山小學校教員として精勵れ聞へある大久保善守氏は腸窒扶斯病み罹り一昨夜十時遂に死去したり

●井上朝鮮日日新聞社長

全氏は社務を帶び昨日來港大池旅館に投宿せるが

●紳商寺島良英來釜

豐前門司に紳商寺島良英氏は韓國貿易經營の爲め一昨貳日汽船神代丸にて來釜したり

●石崎支店長

大坂商船會社石崎當港支店長は社用を帶び元山地方に出張中にて二三日前歸港せるゝ由

●押川時計店の移轉

同店にては近日町に移轉大擴張を爲す答なり

●古川氏と建築業

建築受負業古川氏は當港本町に損料的部屋を開業する計畫にて其筋に該業許可を差出したり

出入船舶

●安東丸	本日入港
●義州丸	明日入港
●漢城丸	五日入港
●天照丸	七日入港
●平安川丸	七日入港

●經濟界小言

▲月の末日　釜山居留地の各町を通行して見る紳商として任じて居る商店の繻頭に任々三日拾五日拂若しくは七日拂等の得手勝手な貼札を認めるが正可に僅の小拂に差支へる譯でもあるまいが一事が萬事で斯る惡習慣の存する限りは圓滿で而も活潑に取引するなどは望む可らずだ▲橫濱の紳商　現に神奈川縣の長者議員たる朝田又七氏は一介の丁稚より商業界裡に驅逐して今の富と地位とを得た人であるが曾て謂た事がある月末拂掛買の行はるゝ地では活潑な商取引をして成功することは望む可らずと釜山商店亦鑿み　るべし▲釜山の商品　殆ど一定の相場が無いと云つても可い僅に五六錢の賞營卷煙草一箇の價でさへ店舖に依りて一錢の相違がある況んや顧客乃一見して價格を識別し難き商品に於ておやだ▲内地では、戰役紀念事業が各地に於て起りて中には一趣一鎭の名を託た野戰軍の巧名に勝る成績を舉た仕事も少なくないし殊更内地人は非常特別税の負擔國債の應募軍事費及び恤兵金品の獻納寄附出征軍人家族の保護其他何から何迄物入の中で苦心慘憺此の經營を遂げたのだ ※山居留民も責めては紀念事業として道路の修築と惡水路の疏通で專充分に遣て韓國に於ける邦人居留地の模範となつては如何▲賃金の低い　韓國を使役する便があるので何時迄も不完全な道路に安ずるは思はざるの甚だしき者だ運搬力を平坦なる道路と器械力に藉るは彼等未開人の低廉なる賃金より幾倍低廉なるを知らざる可らず變物買は結局興を落すに過ぎず▲商賈に最も必要があるは固よりであるが釜山商店の如く徒らに外見のみを拘泥して實力の如何を辨ぜざる遣り方は他に競爭する外國商人が少ないから可い樣な者の最終の功果は覺束なかろふ鳥なき里のコウモリは良賈の取らざる處だ

スパロイドルーヒン
電話 八三二番　南濱町 加藤 北海屋

▲商品紹介▼

臺灣鹽と韓國（二）

韓國臺灣鹽販賣合資會社の近況及臺灣鹽の韓人に歡迎さるゝ理由

臺灣鹽が始め粒の大きい爲めに外觀を見たる韓人は餘り之を喜ぶ譯は無たけれども試みに賣出してみると元來純良の品質であるから長直段の安い爲めに非常の信用を博した、

之を日本製或は韓國製の鹽に比較するときは一斤數に於いて臺灣鹽は正百斤俵である然るに日本製や韓國產の俵入は正百斤の品が這入つて居ないのに直段は壹圓四拾三錢八厘（一ヶ年の平均にて）で臺灣鹽は壹圓〇三錢四厘であるからつまり百斤に就て四拾錢四厘丈け安い譯だ、それで斤數が正百斤あるのだから尚更ら信用されるのだ

韓國臺灣鹽販賣合資會社の事業擴張

斯の如く臺灣鹽試賣の結果が好況であつたので同會社にては新設計の牧の島倉庫では到底此需用に應ずる事が出來ないと云ふので更に貳拾五万坪の土地を手に入れて大倉庫増築中で臺灣鹽大輸入の計畫中である、

現に同社は臺灣に向つて多量の注文を發して居る第一に交通丸にて千九万斤是は已に安平を發して居るから今明日中に釜山に入港する筈だ次の便船にて十六万斤發送の手續になつて居るさうだ、

韓人の鹽を買入るゝ時期

朝鮮では三月より六月迄を尤も鹽の需要多き時期とする、夫れは食料品中の最も必要品なる醬油と味噌を仕込む時なので一ケ年の需要の十八分の七は此時消費するのである、

日本人は統計上一ヶ年平均壹人に付一斗七外であるが韓人は食料に日本人よりも餘計の鹽を要するから少くとも二斗は使用する、

京釜鐵道線路と臺灣鹽の販路

京釜鐵道線路に沿ふて居住する韓人の人口を概算すると三百万人は確かにある此人數は此便利なる運輸機關に由て價の安い純良な食鹽を配布して貰ふのであるから韓國の製鹽が便利の惡い處から運搬して持つて來て競爭する事が出來やう譯がない夫で此三百萬人の韓人は同會社の得意であるから壹ヶ年に六十万石の鹽を賣捌く事が出來る即ち俵に直せば百万俵で壹俵に付二拾錢の運賃としても壹ケ年に二百万圓の運賃を京釜鐵道に仕拂ふ譯になるのだから鐵道の財源として立派なものである丈けの運賃を仕拂ふ臺灣鹽販賣合資會社の利益も亦非常なものであらねばならぬ、現に角此の爲めに京釜鐵道線路の韓人に對する食鹽の輸入は全く同社の獨占さるゝ姿となるのである（つゞく）

斗南獨嘯

▲日露　兩軍沙河對陣の戰線は四十餘里に亘り今尚激戰中とは眞に驚魂破魄の大壯觀國民はたゞ北向して悲壯の感涙に咽ぶ▲既に　露の前衛地を占領し續々として吹雪の中に進行せる我軍は所謂是長蛇の布陣彼を鏖殺せん事將軍胸中に熟す矣▲閔澤　侍從長　聖旨を奉じて酷寒極北の野に彌猟百萬の征者を撫ふ　聖恩宏大將士齋しく感涙して志氣益々恨中すでに敵兵なし▲關閔　使今仁川に入る京城を經て當港に來らん寄語す當港の人々よ聖上の軫念と征路の困苦を想はば歡迎亦是臣民の任▲二十一議會滿了閉院式を舉ぐ天子勅を下して勵精を賞し給ふ擧國一致君民の翊讃極り矣▲天子　宵旰の憂を抱き國民敬虔し誠を盡す議會亦然り有司亦然り而して議會は上下君民の協託宥かす帝國の光榮ある所以▲ハル事件決定水雷艇現存せざりしを證明し露國は其責に任ずべきをいふ露を鳥に云ふも其臘者欺くべからず明證摘摘焉▲露國警察官の同盟罷工を恐れ巡査一名に數名の兵士を附すと天下未だ斯る珍無類の奇談なくして露國是在天下一品の國▲西伯利鐵道愈々同盟罷工して戰爭中止を要求せりクロパトキン聽に舌を出して嗤ふべし是あるがため降伏の機會を得たりと▲李容　羽赴任を好まず一進會彼を窘逼止まず京畿嘲笑して奸臣の末路と云ふ彼窮すと雖朝廷の臣漫に輕侮の徒は我不興也▲秋風　嶺附近火賊蜂起して形勢不穩彼れ猶烏合の鼠賊と雖豫め備へざれば悔あり適例二拾七八年に見當局者の深省を要す▲一進會政談演說會を大邱に開く名論卓說如何か聽者を動かせる彼を猥りに卑むを休よ聽衆の蒸あるも我維新の大業は是立派なれど夫人令嬢が紅粉媚態の歡舞に隨喜悲涙して群るを思へば情なさの極也

電話 一五一　釜山幸町一丁目　Restaurant 小倉庵　日本料理 西洋料理

朝鮮日報

●半日の逍遙　方外

氷雪堅[illegible]は千の紙上を汚しつゝある日報の休刊日で、水曜日は余等の一週一日の命の洗濯日である、即ち休題余は韓國へ渡たのは先月の四日で今日で二十六日にしかならない、余が天性の懶惰は少し許りも詰めた事はある、予半島國の山水を見るのは初めての事では無いが、殊に渡て来てから日の浅い爲先に来た釜山以外の天地に逍遙した事もないので今日は朝から突然に歩行て見ようとは前日来此日論親であつた處が臥床を離れて見ると夜明けからの風が中々強く吹いて居るから長寒的の余には頗る大敵である途々午前中は逃げ延して終つた正午前には風が凪で暖氣も増して来た朝飯も済んだ其處で思切て南濱町の宿所を飛び出した五体を載せた一双の破裏草履何ふ所は何處固より的途なしであるが辯天通から本町へ出て北濱町を過て草梁へと志した此處には内地人も多く人數住居して居るが眼に止まる程の設備は勿論ない漸と仮住居と云ふに過ぎない京釜鐵道會社の事務所も草梁の停車場も數ある社宅も朝鮮では相當の建築物に見へるが内地は何でもない普請此處も其儘素通りで鐵道線路に添て行けば程なく部落な茅屋の櫛比で居る一部落に着た此處が所謂草梁古館の地である邦人との互市場であつた古館の地で其昔の邦人の雑居する者も少なくないが多くは韓人の家屋を借りて小賣商内をして居るに過ぎぬ行こと數丁部落の盡くる所屹然たる墓地を仰ぐ是れが即ち小西攝津守の舊城跡で墓地石垣今尚殷然として存し轉た太閤當年の壯擧を追想しめる邊の下に蹲かゝつた權門がある規模頗る雄大で關壘門と額してある傍らに文字不明の碑石と朽ち敗れた數棟の殿舎がある城跡に攀ずれば一望快濶脚に臨み野を控へ鐵路の逶迤として北に走るの間茅屋の點綴するを見る文祿征韓の役此の地を兵站基点地に擇で韓の咽喉を扼したのは實に所由あるのである豈に懷舊の情なきを得んやだ余は此の城跡に立ちて臺下の樓閣殿舎の壞頽汚敗に委せて茲で窮民の巣窟に宛てられつゝあるを見て轉た亡國を吊ふの感に打たれた低回久ふして日の漸く低きを知り匆忙雙脚を驅つて寓所に歸つたのが午后六時でそこで洋燈の下に半日の逍遙を記した

●火賊襲來の詳報

…壹名を斬殺す……

秋風嶺附近火賊出没の事は過日來しばしば記載せしが今其詳報を得たれば左に報せん去月廿七日午後八時頃秋風嶺を去る西北の方十八丁餘今井鉄一郎方に賊刀剣を所持せる火賊は十余名跋扈し内三名の火賊は手に手に兇棒を携へ室内に侵入せり今井は强健なる男にて少しも驚かず三人を相手に格鬪し初めたり折柄隣家の小川國松方にも火賊押入り時計一個其他を掠奪して去れり、小川は已れ一人にては敵せずと思ひ今井方へ逃れ出した今や今井は三人を相手に格鬪中ゆへ相呼應して火賊と戰へり火賊は叶はずとや思ひけん逃出したれば二人は跡を追ふ内又も今留守中に火賊入り來りて是幸ひと洋服其他を持出しつゝあり今井小川の武名は途中より引返して此有様を見て大に怒り大喝一聲今逃出さんとする火賊を大刀を振ふて斬り下せば脆くも彼一名の火賊は即死したりとなん其時藤井警部は韓兵地方出張中なりしが此報に接し現場に急行せんとする時しも黄澗を去る一里計りの地に武装せる火賊百名計り群集し黄澗郡守の官宅を襲はんとする計畫ある旨急報に接し是又打捨て置くべくもあらず出張を見合せをりしに恐み前記の如く今井小川の武名にて追ひ散したる也其後火賊の消息は詳かならざるも彼等は韓國製の火藥を所持し由聞ずるに鐵道工事中使役せられたる韓人が解雇後衣食に窮して團体を組みさておる兇賊を働き居るならんとの事也右に付當領事館よりは横尾警部をして急行せしめ取調中なる由なれば其後の事は追て報導する所あるべし

●贋造行使者の捕縛

近來贋造紙幣行使者ありとの噂ありしが警戒を怠らざりしが今度右は韓内地より出で來る者にして多く日本人の使用せしを保存せし疑ありし處一昨日發見せし二枚の紙幣は僅かに行使者あるを認め苦心探偵の結果該嫌疑者を捕縛したる由に聞く猶其他にも贋造紙幣の散布しあるやも計りがたければ此紙幣の受授者は注意肝要なるべし

●新版浄瑠理

△勿來關短夜の段　竹本露太夫

處は名にしを負ふ陸奥の關門白河に入りには時は春陽、花は淡煙の中に隠れ千樹依約其極まる處を見ずと稱へられし勿來の關過ぎにし明治革新の其當時を追想し治亂興廢の跡を瞑想して轉た無限の感にしばしが程は茫生の上に憩ひし一人の壯士、時非耶是耶途に降りすさむ春雨蕭々として綿の如く笠蠟磔を傳へて四邊凄景尾羽打枯らせし浪人の宿を求めて幸ひ路傍の旅舎に草鞋を脫しぬ折しも奧より出で來るは其屋のむすめ年は拾九か二拾の色盛り名は花梅とて其名にそむかぬ花顏月も羞ろふ其粧ひ斯る片田舎よもと想ひ込みしは總のはし笑みの類凹に遺されてさすが武骨の壯夫も花には腕き優美の心哭る情は臥床の中想ひは募る胸の中去るべうもあらざりしが斯くてあるべきもあらざれば流石別れの哀別離苦千行の涙は篠原の篠より繁き露の命、昭は果敢ない知死の夢………

●郷々逸

解り積りし不凝の數も　解けりや深なる谷の水　まさ子

大枚屏風を廻して於て　中で二枚の舌つかう　小勇

仲宜く一緒に寢しちや居れど　招れすや火の出る早附木　菊鶴

色も香もある鈕目がないと　うわさに影さす窓の梅　國松

惚れて來るのは嬉しいけれど　秋の月は氣にかゝる　國八

支那は座敷よ日本は御客　露西亞は藝者で彈く割り　映水

理窟綾なす客知らないで　笑凹について飲む涎　溪一木

竹に雀の紋切形も　切れりや仇の睨み合　同

何うで切れりや六段目　緣かぬ女のつら憎い　大有

惚れた證據に押す此判は　眞赤な嘘をいわぬ肉色　靜子

惚れた心を千間なれど　初會座敷のはづかしい　同

投書籠

▲渾々たる春陽山河く水と白き龍頭の邊りに神魂氣魄の氣概を叩く詩人文士はあらざるか(浪士)▲茨にも花咲いて賤が伏家にも戀草萠へて不斗言交したるアノりばんアゝ式部今は如何して暮し居るやら風の便りにならときかまほし(失戀男)▲大坂捕獲社より幾多の孤兒は釜港數千の紳士淑女の温き情に喋々深の川に沐浴するの夢でも見て居ろう(演奏者の一人)▲貴社の百字文壇に僕は投書しますから掲てくださいますか(何ひ生)▲良否の審査は記者よりあり續々投稿されよ(係り)▲大廳町陶磁器商○三は非常に勉强す店員も中々懇切だ(需用者)▲共同便所設置問題は未だ提案に及びませんか(急設生)▲眞荊の中にツンと咲いたる百合の花とは韓鳳樓の内で誰れですか(遊客)▲一心籠ればなりとお慫けも澤山ですチエ(岡綱生)▲當社の其角遊冊外二名の君達よ御請求の趣ひき拝了承折角の御投時に接し奈何なる誤りにてか編輯机上の編纂より何れへか埋沒せし不注意の段乞ふ諒されよ(擔當記者)▲日本通信社の西直美氏の寓所御承知の方は本欄にて御知らせ下されたし(必要生)▲紳士紳商の淨瑠璃會とはサテモ香氣な人々のみツンな餘らないと騷ぐより何とか良い遊の趣好もありそうな者だ國事多端の今日に(注告生)▲房の字は宗教より割り出した字とせば姪妓の青樓に房と云ふとが書いてあるのは如何云ふ意味でせうか(開城教木)▲富平町の公番所に行て特別郷の近傍に喜多川と云ふ人を問ふたかコワ奈何に大喝一聲知らんとは情けなや千里異里の異郷に行ても物を尋ねれば教へて呉れるに如何して斯う不親切であろう(北濱酒店内將拾)▲在釜山の煙草屋程不統一はないりーの如き三錢で賣る處もあれば參錢五厘四錢五錢とは驚くの外なし(隈川)

●大商店訪問記(十)

▲幽谷藥店(幸町)

幽谷藥店を訪ふ昨年六月開業致したですから未だお話し申すほどもございません尤も此店の開業は拾五六年以前なので店主は三回程変逃て居ります藥丸層倍と申して相うは儲かありません而かし是から夏期の藥が卵々賣れます化粧品もやつて居ますがマア矢張り弗々捌ける方ですと云ふ店主は酒落ふして一見商人肌の人也

▲柴田呉服雜貨店(幸町)

サア何うぞ此方へ……一見店主の力ある實業家なるを知らる……呉服も昨今は時期でございませんが馬山浦地方に酒と共に大分送りました……最も只今は例年の如く商界活動の時でございません下駄ですかこれは大阪から仕入れて居ります左樣品が品ですから破損はないです税金が澤山かゝりますから左樣……釜山で製造したから大分間に合いませう夫れより店主は同店の酒商部等の現狀より經濟界に入りて嶄新なる卓說に記者は耳を傾けぬ

釜山商況

米穀類を始め百貨共商況凡て鈍調なり木綿織物は節季追々迫りたる取引まで薄し紡績糸も余り變動なし

魚市場(一昨三日)

水揚高		八百四十四貫六十八錢
たゐ	十メ目	廿三圓
尼ね	同	十五圓
平め	同	十四圓
鮑		十二圓



大丸呉服店